方向

第七九号　一九八八年二月二三日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

照珍律師（四）

赤谷明海

〈一、照珍伝について（住持）〉

最後に金剛寺であるが、『住持記』には年六十三元和三年二月晦日入寺とある。照珍とは親しい朋友であった住持慶純が寂したのは慶長十三年であり〈註〉、跡を弟子尊純が継ぐが、元和三年二月廿九日年二十七で他界した（法金剛院蔵「尊純大徳分衣表白」）。

〈註〉法金剛院蔵「慶純大徳分衣表白」奥云「慶長十三年戊申二月十一日八幡金剛寺慶純大徳他界也南無地蔵菩薩久同法□□涙袖満」

この日が即ち前記照珍入寺の日と一致する。従ってこの日は厳密な意味での入寺の日ではなく、尊純の死後、後嗣のないままに、あとは縁故の深い照珍が住持の名義をもつようになったことを示すにすぎない。金剛寺は善法寺のすぐ東北、寿徳院からは三、四丁南に位置し、青年時代は勿論のこと、その後も屢々訪れたものと思われる。記録の上でも慶長十年十一月には、招提、泉涌、八幡の僧を職衆に請うてここで伝法灌頂を開壇し（法金剛院蔵　照珍筆　請定艸案）同十二年には慈慶大徳三十三回忌の曼供導師を勤めた事（法金剛院蔵照珍艸「曼荼羅供法則」）が判る。住持後については、元和五年二月、先住尊純の三回忌を兼ね、延引していた分衣の作法を執

行し〈註〉、同年十月には同寺若宮八幡用の『鎮護読経作法』（法金剛院蔵　照珍艸「鎮護読経作法」奥書）を書いている。これは再び灌頂の行われたことを示すもので、更に寛永四年九月にも大阿闍梨となって伝法灌頂を修している（法金剛院蔵観景筆「請定」一紙）。この時の職衆を泉山、招山、八幡の三所から招いている。斯様に他の所住の寺では見られなかった灌頂に関する記録がすべて金剛寺に集中しているのは注目されていい。三宝院憲深方につながる八幡流の伝統と、八幡宮を中心にした密教隆昌の場所柄とによるものであろう。

〈註〉法金剛院蔵「尊純大徳分衣表白」表紙に云「八幡金剛寺尊純大徳第三回忌来二月廿九日依之公事付雖延引此作法行　元和五巳未二月　日　宝園照珍」

寛永五年の照珍の遺言状によれば、金剛寺の跡目を玉琳に継がそうとしており、従って死に至るまで住持の名義が続いたようにとれるが、善法寺の太鼓の修理銘によれば元和八年には円善が住持しており、その頃一時的に円善に譲っていたものか、円善が単なる代務的な住持でしかなかったものか、その辺の事情は明らかでない。また当寺の世代についても判然としない。

以上『住持記』を本として、照珍の歴住した寺院七ケ所を挙げてきたのであるが、文中少し触れたように、この外、泉涌寺塔頭の悲田院と安楽光院及び法金剛院塔頭の亭子院を加えれば都合十ケ寺となる。

〔示寂〕　慶長廿年六十一才の夏、照珍は自分の肖像を画かしめ、それに遺誡偈（法金剛院蔵　写本「照珍宗師御影賛」）を書いて死後に備えているが、これは還暦に至った年齢の自覚から、或は当時そうした習慣でもあってものした事と思われる。しかし寛永四年三月に木造の肖像を作らした事は愈々死期の近づいた事を知っての所作

であろう。同じ時に弟子達に宛てて人事、会計を主とした遺言を認めている（法金剛院蔵　寛永四年二月五日附「照珍遺言状」）。翌五年十月には八幡に於いて更に死後の指図を書きとどめ（法金剛院蔵　寛永五年十月附「照珍遺言状」）、遂にその十二月六日に寂したのである。年は七十四才。夏数については『記』に「通受夏臘五十有五。別受戒臘四十有九。」とあるが、この事は先に受戒の項でも少しとりあげているので、今考証を省くが通受は五十七夏と訂正しなければならない。別受は四十九夏で正しい。

死去の場所は法金剛院であろう。同寺に墓が現存する。葬儀の記録はないが、十二月十九日に法金剛院で分衣の作法を行った際の記録がある（法金剛院蔵「宝園照珍分衣道具日録」）。この時の僧衆は南都衆六人、泉山十七人、八幡八人弟子四人、計三十一人、役衆は羯磨が泉山楽音院、答法が招山湯屋坊、五徳が南都知足院である。

〔門弟〕　照珍が受戒灌頂を授けた者は少なくとも百人を越すと思われるが、その中、名の伝わる者は雲龍院如周、竹林寺賢照、湯屋坊俊盛、壬生寺祐海等十人程にすぎない。更に照珍親度の弟子としては、前記の如く僅か四人しか分衣に列していない。伝香寺、良玉、尊玉、玉琳の四人であり、何れも年小の者ばかりである。伝香寺とは前に触れたごとく芝岳照薫であり、光宣と称し最初の字は光玉であったと思う。後、寿徳院を再興し、招提寺の世代にも上っている（『記』にその伝がある）。良玉は亭子院を嗣いでいるが、その伝は詳かでない。尊玉は観景照嶽の事、中原職忠の子で、天海僧正の嗣法寂教院晃海の実弟に当る。『記』に伝を収めており、玉周筆の『観景和上伝』（法金剛院蔵）もある。法金剛院の後を托され、泉山にも出世し、山崎神宮寺を兼帯している。玉琳は金剛寺を譲られた人。然し、その後の事についてはなにも判らない。右四人の外、遺言状には空賢、光賢、

覚印などの名も出てくるが、所謂子飼いの弟子ではなかったように見える。従って照珍の直系の弟子は極めて少なく、後世にその伝の明かなものは伝香寺照蓮と法金剛院照嶽の二人のみである。

孤山雁信

―赤谷明海書翰集―　（一二三）　原田憲雄編

★1965.9.5. 原田憲雄宛。手紙。これと次の手紙は消印がないので整理を誤り、前号のものと前後する。

先日の雨以来だいぶしのぎやすくなりました。朝夕の水やりから少しの間でも解放されたのも有難い余徳の一つ。この前御邪魔してからはや一と月は経ったと思いますがお変りないものと想像しています。

何時ものことながら、休みの去るのは早いもの、未れんをのこしながらも仕方なく、重い心を引きずってまた学校通いをやっています。そのうち慣れるでしょうが憶劫なことです。

方向誌有難うございます。はや十一号、ガリ切り、印刷、製本、すべて一人でやっているのでしょうが、よくも根気が続くものと、とても小生では真似ができません。こんどのはなかなかの大冊、執筆者も多くなってにぎやかです。例によって折角いただいても猫に小判ですが、中新君のもの、久し振りに読めるのを楽しみにしています。

北条貞時建立にかかる覚園寺（泉涌寺末）を、東京からの帰途訪れました。ここで図らずも仏師白石宗雄氏のお墓のあるのを知り、お参りしましたが奇縁でした。

あそか病院での〈足利八郎氏の〉診察の結果は　胃潰瘍のあとは快癒　胃アトニーと胃下垂程度、右肺に空洞

があるが、三年前の写真と変化がないので切除に及ぶまいといった　まずまずのところでした。しばらくのところは生命を保証されたようで安心しています。

去月最後の日、奈良の徳田〈明本〉師と、唐招提寺の鎌倉期の学僧照遠律師の遺跡を尋ね、室生村無山まで行ってきましたが、ここは向淵から少し奥に入ったところ、帰途正定寺に立寄って東森〈善城〉君と会ってきました。復員後　何度も何度も休みながら　訪ねて行ったのを想い出します。それ以来はじめてのことです。皆達者、娘さんは高校三年と一年とか。ここでも『方向』の話しが出ました。

自慢していたブドウはカミキリ虫のため殆ど熟すまでにしなびてしまいました。そんな中からいくらかを選りだして砂糖を加えながらビンの中で一週間程ねかせてしぼった汁をお届けします。ブドウ酒とブドウ汁との合いの子といったところでしょうか。口に合うしろものではありませんが、自家栽培の自家醸造といったところがミソです。お母様、奥様にもよろしくお伝えの程を。　九月五日　明海　原田憲雄様

★1966.5.8. 同宛。手紙。墨書。

方向十二号并に常建詩の校註御恵与賜り有難うございます、折角の労作も小生の如き不学の徒に帰したのでは宝の持ちくされと　もったいない想いです。ダリヤ、グラジオラスの球根、到来物のおすそわけです、空地があれば育ててやって下さい。幸便に托します。五月八日学校にて

★1967.3.9. 同宛。葉書。

「方向」十三御恵与有難うございます。小林〈太市郎〉先生の追悼講話のみ　まず拝読しました。禅月大師の著

作についてちょっと耳にしていた程度ですが、あそこまで先生に親近されていたのかと今更のように驚いています。小生の方、校長が辞めることになり、教頭も更迭という事で　学内の騒音が一段と高まっています。昨夏以来の給与問題に関する仕事がいまだに片づかず、明るい間に帰宅することは殆どありません。そこで何が何でもと勝手に予定を立て、この二十七日から五日間強引に東九州の石仏巡礼に旅立つことにしています。水仙の花時にもなることとて、四月上旬には拙宅までお運び下さい、いずれ御連絡いたします。右とりあえず。〈複写した葉書は次の頁を参照〉

一條寒禍是生涯
自性寺大雑居で　ゆかりにくい　私尚の逆境
をきき　江田方様　私とも　膝を交えニナ
数年ぶりに　酒をくみかわしました。歓いに
つい夜を過て　今朝はいささか宿酔の体。
これから　論吉翁　羽宮を見学して　日南へ
向います。つい卒業以来お会いお来ていません
が貴兄の噂はかねぐお聞きしています　いつか
はお会い出来るものと思っています。お元気で　雪禾
昨夜は　肴飲コ　新時代の想い出話に花を咲かせました。
貴兄も一度又是非　日南津　とお係り　印します　河化

1967年3月28日

★同宛。葉書寄書き。大分県中津市〈新魚町〉自性寺　河北一道　高木大摂　赤谷明海〈表書は高木氏〉

一条寒衲是生涯

自性寺大雅堂でわかりにくい〈河北〉和尚の説明をきき、江田〈高木氏の前姓〉大摂和上とも膝を交え、二十数年ぶりに酒をくみかわしました。歓びについ度を過し、今朝はいささか宿酔の体。これから〈福沢〉諭吉翁宅を見学して臼杵へ向かいます。〈以上赤谷〉つい卒業以来お会い出来ていませんが貴兄の噂はかねがねお聞きしています　いつかはお会い出来るものと思っています、お元気で〈高木〉

昨夜は痛飲　予科時代の想出話に花を咲かせました、貴兄も一度是非御来津をお待ち致します〈河北〉

★1967.5.18.同宛。手紙。

青葉風のさわやかな季節ですが　お変りありませんか、花やかに色どりを添えていたヒラドツツジがすっかり萎んでしまって　二、三本のバラと、庭の花以外はすっかり青一色になってしまった我が家の庭です、

先日は続京都風土記〈大塚五郎先生随筆集〉を学校までお届けいただいたのに、連絡が悪くて　長い間　小生の机の抽出に入ったままになっていました。その後、嵯峨での集いの写真を頂戴し、且つ又　集英社刊の御著王維〈中国詩人選6〉を賜り、数々の御好意をいただき有難うございます。その度に御礼状を差し出すべきところ、延引を重ね、斯様に一括しての御挨拶といったことに相成りました、失礼の段　平に御容赦願いあげます。

三月末に東九州を廻っていた頃はなかなかに元気でしたが、　四月に入ってからの慣れない仕事に毒せられたのか　中旬頃から体調をくずし、時には休みながら　重い気分で勤めていましたところ、何時までもすっきりしま

せんので　目下　また休んでいます。時に胸痛があったり、肩がこったり、倦怠感がひどいので　過去の病気の再発かと疑ってもみましたが、血沈は悪くないので、医師は　心配いらないと云っています。結局感冒という診断ですが、身体に余力がないのか、次から次に　引きそえる始末です。今日で三日間、ぐうぐう眠ってばかりいました、これで大分元気をとり戻しましたので、明日から登校して、開校記念日の行事を勤めますが、この期間の様子によっては　大きな病院で精密検査をうけることにしています。こんなことで丸一ケ月間身体のことにかまけて過して参りましたので、貴兄から紹介して貰った　習字の先生の事もそのままになっています。

以上私事で耳を汚しましたが、いずれ　近いうちに庭梅の苗をもって元気よくお訪ね出来ることと思います。五月十八日夕　明海　憲雄様

★1967.8.5.　同宛。葉書。

炎暑の候御一同様御変り無之候や御伺申上候京に夕立があっても伊勢田までは及ばず、毎日水やりに追われています、昨日は態々のお越しにも不在にし失礼しました、このところ留守宅のところへお運びいただくことが例のようになってしまいました。家内は研究会とかで毎日奈良通いですし、小生の方も登校する日が多い暮らしぶりです。先月下旬あそか病院で胸や胃、耳など二日間に亘って検診を受けてきましたが、案ずるような病状ではないとのこと、吸入器での咽頭治療をすすめられましたが、相変わらずの不養生で、咳をしながら煙草を喫っています。9日－13日と20日－28日が休みですが、前期は若狭へ行きますので、20日過ぎに参上したいと思っています。なおいろいろの心尽しのお品有難うございました。特に奥様の手に成るらしい編物、家内が喜んでいます。

母のオルガン

1988.1.15.

原田　慶

私は、滋賀県で生まれて、五才の頃、群馬県の嬬恋村に住むことになった。父が吾妻鉱山という硫黄の採掘をする山へ勤務したからである。その頃には、第二次世界大戦が広がってきて、兵器を作るのに忙しく、オルガンのような平和な道具は製造されなくなっていた。母は満州にいる自分の妹に頼んで、オルガンを買ってもらった。

それはミネルヴァオルガンといったが、ローマ宗教の女神ミネルヴァから名付けられたものだろうか。やっとそれが、私達のいえに届けられたとき、母はどんなにうれしかったことだろう。母はその時二十五才、ほんとうに音楽がすきだった。私と二才ずつ間をおいて妹と弟と三人の子どもがあり、父は、自分だけが鉱山に上がっていたので、山の下の村で、私達は暮らしていた。

母は子ども達を相手にオルガンを弾いた。「よい子」という雑誌をとって、幼児のための歌をオルガンで弾き私達といっしょにうたった。その中で、私がおぼえているのは、ほんの一節くらいしかない。「ポンポモツルリコ、オフロバノ、ヒトリノオナガシヨイコチャン、ヨイコノアテッコダアレ」というのである。

私が、小学校、当時は国民学校といったが、一年生に入学する少し前、アメリカやイギリスとも戦うことになって、世の中がさわがしくなり、オルガンの音など響かせてはいられなくなった。若い人はみんな、戦争に行った。学校の先生も次つぎと戦争に行き、私達は日の丸の旗を振って、電車の駅で見送った。子どもを引きつれてよそのサクランボの木を荒していたがき大将も、兵隊に行き、何か起こしたらしくて、村に憲兵がきているなど

といって、私達までが、ひっそりと息をころしていたようなこともあった。食料も着る物もすべて配給制になり、人の心がとげとげしくなっていたこともあって、三人の子どものいたずらに、母は困り果てていたようである。

「そんなに言うことをきかないのなら、母ちゃんはもうどこかへ行ってしまうから。」と叱られた翌日、日が暮れても母は帰って来なかった。三人で裏口に座って途方にくれていたが、母は畑へ行っていたのだった。いくら叱られてもあの頃の自然は私達に、あまりにも魅力が大きすぎたのである。その間に、もう一人弟が生まれて、肺炎で亡くなった。

ずっとオルガンは閉じられたままで、母は、それ以後もオルガンを楽しむような日は来なかった。戦争の終わる少し前、昭和二十年七月の末、父のところへ召集令状が来て、八月一日に、三鳴の重砲隊に入った。その時に私達も一緒に滋賀県へ帰ったのである。母は、一才になったばかりの、小さな妹を抱いていた。列車は満員で、一般の人は乗せないのだけれど、父が入隊するのに間に合わせるために駅の人に交渉して、私達も一緒に貨物列車に割りこませてもらった。まわりは軍服の人ばかりで、父は若い頃に一年志願兵を終えていて、応召したとき少尉だったが、大声で敬礼が交され、もう戦場にいるような雰囲気であった。

途中、空襲警報に、列車が立ち往生するなど混乱にもまれながら、私達はなんとか、滋賀県の母の里までたどりついた。そこでほっと息をついて間もなく、戦争が終わったのだった。その放送があった時、祖母と私と妹の三人は、近くの神社の森で戦闘機の燃料をとるための、松脂を集めていた。敗けたと聞いた時には、みんな死ななければならないのだと思ったので、祖母は、心配しなくても、ちゃんと死なせてやると言った。どんな方法を

考えていたのかは、聞かなかったが、祖母の言い方には私達を安心させるだけの自信が感じられた。

誰も死なずにすんで、九月から学校が始まると、私と妹は祖母の家から、その地域の学校へ行った。生まれた土地ではあっても、私は滋賀県の言葉をおぼえていなかったので、その学校へ行っていた一ケ月余の間、学校で一言もしゃべらなかった。学校では、私が何もわからないあほうだと思われていたが、たしかに突然あまりにもたくさんのことがおこり、死ななければならないと思ったのに死なずにすんで、私はただ呆然としていた。

十月になって父が帰ってくると、私達は、自分の家へ帰り、学校もまた変わらなければならなかったけれど、その学校が城跡にあって、まわりが堀に囲まれ、水面には、かいつむりが、水に入ったり出たりしていたことを憶えている。

家に帰ると、まわりの人々が、私達を知っていてくれたので、安心して、私も少しずつしゃべるようになっていった。

しかし、それからが、ほんとうの母の苦労の始まりだったのだと思う。父は、私達をおいて再び群馬県の鉱山へ行ってしまい、その後もずっと、私が高校二年生になるまで、単身赴任を続けていた。

農家の次男に生まれた父は、農業をするわけにはいかなかったので、昔で言う、月給取りになったのである。村に建てた家も、ローンのようにしてずっと支払っていたようであるし、学資を出してくれた遠縁の人にも返していたらしいが、私達は、そのようなことを少しも知らなかった。父は、自分の苦労は、女や子どもに言っても仕方がないという、考え方をしていたようである。そして自分の生まれた故郷をこの上なく愛していた。おそら

く、土地を継いで、生まれた土地に、生きていた人よりも、土地を出て働かなければならなかった父の方が、何倍も故郷を愛していたと思う。後年、自分の家に落ち着くようになってからは、村会議員などもして、村のために、熱心に働いた。亡くなった時には、郷土誌を一冊の本にまとめるための下書きが残され、発行所を自宅にして、「愛郷社」と名づけている。これほどまでにと、私はあらためて、父の思いの深さを知るのであるが、父のような出発を余儀なくされた人というものは、ついに異邦人ではないだろうか。努めればつとめるほど、人びとから浮き上がり、再びもとに戻ることはむつかしい存在ではないのだろうか。しかも、そのような人ほど、自分の思いをわかってくれる人を求める心は、切実なものなのである。今、父は、両親、兄、姉達と同じ所の土に還り、やっと安心してほかほかと温かい思いに眠っているにちがいない。

父が群馬県へ行って後、四人の子どもをかかえ、村に残った母は、戦後の混乱の中で大変な思いをしていた。都会に住む人の食料難はひどかったが、村にいて、まわりに農作物がありながら、農業をしない私達にも、食べる物はなかった。働かざる者は食うべからずの世界だから、農家の人は、さつまいもの蔓や葉さえも、めったにはくれなかった。母の箪笥には、もう食物と代えてもらう着物も帯もなくなり、最後の夏帯は、種まきに使うために塩水に浸けた籾の残りを少しもらったが、炊いても御飯にはならないので、炒ってポリポリとかじった。

母は、とうとう米つくりをする決心をした。農具といっても先のすりへった鍬と鋤が一丁ずつあるだけだったが、田は父が祖父からもらったのが一枚あるということで、そこを作ることになった。父のいない所で、小学生の子どもを相手に、何もわからない農業を始めようというのは、無謀なことである。農繁期が終わる度に胃けい

れんを起こす母のために、私達は塩を炒ったり、こんにゃくを茹でたりしておなかを温めるのだった。

また、田は広く、地味が浅くて水保ちが悪く、囲りの田より少し高かったので、稲に水を入れるのが大変だった。もぐらが通ったりすると、たちまち水は下の田に流れ落ちてしまう。水口が他の田より高いから、水路にいっぱいに引いてこないと、田へ入れることができない。昼間は、他の田に水を入れるので、順番がまわってこない。仕方なく、夜の十時が過ぎた頃、私は妹か弟をつれて、田へ水を入れに行く。懐中電燈と棒切れを持って、村から離れた田地のはずれにある田へ行く。棒切れで草の畦道をたたいて歩かないと蛇がこわいのである。水路の一ばん上まで行って、よその田で水を止めているのを全部切って、水が一杯に流れるように引いてくる。そして堰き止めて、私達の田へ水を入れた。広いので一時間以上かかる。どのあたりまで入ったか、時どき確かめながら、水口にしゃがんでいる。足がしびれてくるのを我慢しながら、そっと懐中電燈で水口を照らし、草をちぎって水に浮べると、草は勢いよく田の中へ流れ込む。しばらくして、再た草を浮べてみると、水が田から逆流していて、草が外へ流れ出る。おかしいと思って、あたりを透かしてみると、水路の上の方で人の気配がする。どこの田でも、水の欲しい時は同じだから、誰かが田の水を見に来たのである。私達はそのままじっと、動かずにしゃがんでいる。その人影が村の方へ帰って行くのを待って立ち上がり、私達はまた水路をたどって行って、水を取り返してくるのである。こんなことをするのは、子どもの方が目立たなくてよかったのであるが、とにかく私達は母を助けて必死の思いで農業と取組んでいた。

そのうちに、父も少しずつ勤務地を近づけて来て、月に一度しか帰って来なかったのを、週に一度帰って来る

ようになり、物置きなども建てて、少しずつ農業をする条件を整えていった。

村に帰ってからは、母はオルガンの音など響かせるわけにいかなかったし、私達にもあまり弾かせなかった。そして、どういうきっかけからか、小学校に貸すことになり、オルガンはリヤカーで、学校へ運ばれて行った。オルガンは教室を廻り、放課後など、子どもがじゃんけんで順番を決めて弾いたが、私は弾いたことはなかった。

中学三年生になるまで四年間、農業をして、私はその夏から受験の勉強をするために、農業はあまりしなくなった。机の前に座って、勉強などするより、泥や汗にまみれている方が、数段おもしろいと思ったが、本物の農家ではなかったから、仕方なく勉強した。その後、農業の仕事は、次つぎと下の妹達へ廻っていったのである。

オルガンが学校から帰って来た時のことは、私には記憶がない。いつの間におぼえたのか、母がドレミで歌うのを聞いて、弾くようになり、だんだんと私達は、それほど気がねせずに、オルガンの音を響かせるようになっていた。

つい最近まで、空気袋もぼろぼろになったオルガンが、縁側の隅に置いてあったが、邪魔になるので仕方なく、数年前に捨てたということである。母の若い頃にたった一つだけ夢のかなったものだったのに、戦争のために、母が弾くことはほとんどなくて、壊れてしまった。

私は勉強したけれど、基がしっかりできていないから、私達の農業と同じことで、空廻りばかりしていた。とにかく学校を卒業して小学校の教師になった。いつも落ちこぼれながら、ただがまんと頑張りで、二十年間、子ども達の中に立ち続けていられたのは、私の出あったすべての人のやさしさと寛大さと、それからもう一つ、こ

の母のオルガンのおかげであったと思っている。

弾くことを習ったことはないから、オルガンやピアノで弾けないところは、自分の声やレコードで補って、子ども達といっしょに歌うのがすきだった。私の幼い頃、母が歌わせたように、私もオルガンを弾き、子ども達の顔を見ながら、いっしょに声を張り上げていた。

今、思い出の端にふれてみて、自分がどれほど大きな力に生かされてきたかに気がついた。これまで生きていてよかった、といまさらの思いがしている。

悪　ビ　ク

―法華経巡礼　11―　　1988.2.13.　　原田憲雄

バラドヴァージャ。『ブラーフマナ・サンユッタ』（南伝・一二）によれば、マガダ国都ラージャグリハのバラモンである。妻のダナンジャーニーが釈尊の信者で、いつも「ナム世尊」といっていた。夫に食事を運んだときにも「ナム世尊」といったので「この売女め、いつでもあの禿頭の沙門を讃えるが、おれはこれからあいつを論破してやる」「この世界にあの方を論破できる者はいませんよ。むだだけれど、行ってみたら分るでしょ」かんかんになった夫は釈尊を訪ね、こう問い掛けた「何を殺せば楽しく眠れ、何を殺せば悲しまずにいられるか。いかなる殺害をゴータマよ君は讃えるのか」釈尊は答える「怒りを殺せば楽しく眠れ、怒りを殺せば悲しまずにいられる。毒の根で蜜をもつ怒りの殺害を、バラモンよ、聖者は讃える」これを聞いてバラドヴァージャは、出

家して仏弟子となった。その後、マガダ、コーサラ両国のバラドヴァージャと呼ばれるバラモンの多数が、やはり釈尊と問答の末、仏弟子となった。ここでの長老バラドヴァージャは、ダナンジャーニーの夫だった人を指すのだろうが、他の人をも含めたとみて差支えはないだろう。

マハーナンダ。仏弟子でナンダと呼ばれる人はたくさんいて、次に見えるウパナンダ、スンダラナンダもそれだが、マハーと美称でよぶこのナンダが誰なのかよくわからない。『法華文句』は「放牛難陀」とする。それなら『サンユッタ・ニカーヤ』（南伝一・五）に見える次の人であろう。

あるとき釈尊はカウシャーンビーでガンジス河の流れに運び去られる木塊を見ながら言った「ビク達よ、この木塊がこの岸に着かず、あの岸に着かず、中流に沈まず、陸に打ち上げられず、人に取られず、渦巻に取られず、内が腐らなかったら、木塊は海に向かい、海に趣き、海に入るだろう。同じように、君達がこの岸に着かずあの岸に着かず、中流に沈まず、陸に打ち上げられず、人に取られず、渦巻に取られず、内が腐らなかったなら、ニルヴァーナに向かい、ニルヴァーナに趣き、ニルヴァーナに入る者となるだろう」。あるビクがたずねた「この岸とか、あの岸とか、…は何の喩えですか」「ビクよ、この岸とは眼・耳・鼻・舌・身・意、あの岸とはその対象である色境・声境・香境・味境・触境・法境、中流に沈むとは耽溺、陸に打ち上げられるとは我慢、人に取られるとは世間の人達と共に住みその人達の喜びや悲しみに捲き込まれること、渦巻に取られるとは五欲、内が腐るとは悪法邪戒に従い沙門・行者でないのに沙門・行者という者の喩えなのだ」。そのときたまたま側で聞いていた牧牛者のナンダが「わたしはこの岸に着かず、あの岸に着かず、中流に沈まず、陸に打ち上げられず、人に取

られず、渦巻に取られず、内も腐りはしないでしょう。尊とい方よ、あなたのもとで出家受戒させてください」

「それではナンダよ、牛を主人に返してきなさい」ナンダは牛を主人に返し、釈尊の弟子となった。

ウパナンダは『スッタ・ヴィバンガ』によればシャカ族出身のビクで説法が巧みだった。ある富豪が彼の話を聞いて感動し「入り用の物があれば、何でもさしあげます」というと「あなたの着ているその上着がほしい」と求め「では帰って着替えてからさしあげます」というのに「あなたはくれる気もないくせにやるといった」とからむ。富豪はやむなく上着を与え、下着のまま帰ったので、見た人々の間で評判になった。このほかにも衣類・食料などの布施をめぐる数えきれないスキャンダルの主である。釈尊の弟子のなかに「六群ビク」と呼ばれいつも党をなしていたビクがあった。みな多才多芸で論議・説法に巧みだったが悪行が多く、戒をあらたに定める因縁となった。その五人はシャカ族のナンダ、ウパナンダ、チャンダ、アシュヴァカ、プナルヴァスで一人はバラモンのカローダーインだとされる。ここでのマハーナンダは牧牛ナンダではなく、ウパナンダと共に、あるいは六群ビクの代表として出ているのかもしれない。正・妙両本にはバラドヴァージャとウパナンダの名が見えないのは、両本の拠った梵本に無かったのかもしれない。バラドヴァージャはともかく、ウパナンダを六群ビクの代表として省いたのだとすれば、古い『法華経』の悪ビクに対する考え方が、後の「提婆達多品」を包摂する段階の『法華経』より厳しかった、といえるかもしれない。

とにかく釈尊の弟子の中には現に師の釈尊の手におえない連中がいたのは事実であり、しかもその多くがシャカ族出身の貴族や富豪の子らであった。彼らは、美衣を着、美食をし、なかには白粉やアイシャドウをつけ、美

童を弟子として蓄える者さえいた。世間の物議をかもす度に釈尊は彼らを叱り、戒を定めた。だが、案外、世間では彼らは人気があったらしい。彼らは才能があり、話術にたけ、魅力があった。その無遠慮なところは、非難する人もあったが、無邪気だとか、気が置けないとか、もてはやす人々も少なくなかったのであろう。今の芸能人や政治家、文筆人や宗教家にいたるまで、にぎやかに活躍する人達は、厚かましい連中の方が人気があり、清潔で遠慮深い人はあまりもてないことからも、そこらの消息が伺えようというものである。善悪をこえて魅力のある方向に人の心は流れる。人気に浮わつきながら、またそのはかなさを痛感する人達によって、釈尊の教えが改めて味われ、そこから新しい教団が生まれ、育ち、衰え、滅びてゆくことがあるとしても、ひとつの無常、つまりは仏の教えであるかもしれぬ。

仏教教団を破壊した人として、悪魔のようにそしられるデーヴァダッタを仏と仰ぐ教団が、七世紀にもなお存在したらしいことが、玄奘三蔵によって報告されている。デーヴァダッタにも魅力があり、その教団も一面の真理を伝え、「正統」「大乗」を自称する教団の堕落に対する批判勢力となっていたかもしれない。

スンダラナンダもまたシャカ族で、釈尊の異母弟だった。釈尊がはじめて帰郷したとき長身美貌の青年となっていて、釈尊にそっくりだったらしい。名はナンダだが、シャカ族のスンダリーという美しい娘と結婚することになっていたので、スンダリーの夫となるべきナンダという意味で「スンダラナンダ」とよばれる。釈尊はこのナンダに強いて剃髪出家させた。ナンダはスンダリーを恋しがって、何度も逃亡しようとしたが失敗し、ついにビクとしての道を歩むことになる。「わたしは、正しく思惟しなかったので、身を飾りたて、浮わついて、惑い

やすく、愛欲になやまされていた。太陽の子孫であり指導に巧みな覚者により、わたしは正しく修行し、生存に執着する心を抜き去った」という詩がかれのものとして残っている（南伝・二五）。なぜ強いてスンダラナンダを出家させたのかは、よくわからないが、この事件は『仏本行集経』（大正・一）『雑宝蔵経』（大正・四）など北伝の経典にドラマティックに描かれ、南伝の『テーラガーター』の注にも似た記事があるそうである。

プールナマイトラーヤニープトラは、マイトラーヤナ族の女の生んだ子であるプールナの意。『仏本行集経』（大正・三）によれば、コーサラ国のシャカ族の国都カピラヴァストゥの近村のバラモンの大富豪であり、釈尊の父王スッドーダナの師であった人の子として、釈尊と同じ日に生まれた。容姿端正で、聡明で注意深く、ヴェーダなどのバラモン学はもとより、他教の神学、俗世の諸学に精通し、少年のころから大人の風格があった。釈尊が出家したことを聞くと、彼もまた友三十人と共に出家し、雪山で苦行し、釈尊の成道を聞いて、弟子となった。『ラタヴィニータ・スッタ』（南伝・九）は、プールナとシャーリプトラとの出会いを次のように語る。

釈尊がラージャグリハにいたとき、各地から集まった弟子達にそれぞれの地での学徳すぐれた修行者の評判を聞いてみるとプールナの評判がずばぬけていた。釈尊はシュラーヴァスティーに行った。噂で知ったプールナは釈尊を訪ね、法話によって励まされ歓喜し、アンダ林で休息した。そのことをあるビクから聞いたシャーリプトラは林に行き、休息を終えたプールナに尋ねた。「あなたは釈尊に従って修行するつもりですか」「ええ」「あなたは、戒を清らかに保つために修行するのですか」「いいえ」「では見方を清らかにするためですか」「いいえ」「では心を清らかにするためですか」「いいえ」「疑惑をきっぱり断ち切るためですか」「いいえ」「道と

道ならぬものをはっきり知見するためですか」「いいえ」「方法を、はっきり知見するためですか」「いいえ」「知見を明白にするためですか」「いいえ」「ではいったい何のために」「執着を無くし、完全なニルヴァーナすなわち覚りを得るために、釈尊に従って修行するのです」「戒を清らかに保つことは、執着を無くし、完全なニルヴァーナを得ることですか」「いいえ」「見方を清らかにすることは執着を無くし、ニルヴァーナを得ることですか」「いいえ」…「では、どう考えたらいいのでしょう」「喩えで説明しましょう。シュラーヴァスティーにいる王がサーケータに急用ができたので両地の間に七台の乗り継ぎ馬車を用意させるようなものです。シュラーヴァスティーの宮門で第一車に乗って進み、第二車の所まできたら乗換え、そのように次々に乗り継いで、第七車でサーケータの宮門に入るでしょう。ちょうどそのように、戒を清らかに保つのは、見方を清らかにするためであり、見方を清らかにするのは心を清らかにするためであり、心を清らかにするのは疑惑をきっぱり断ち切るためであり、疑惑をきっぱり断ち切るのは道と道ならぬものをはっきり知見するためであり、道と道ならぬものをはっきり知見するのは方法をはっきり知見するためであり、方法をはっきり知見するのは知見そのものを明白にするためであり、知見を明白にするのは執着を無くし、完全なニルヴァーナを得るためなのです。ですから執着をなくしニルヴァーナを得るため、釈尊に従って修行するのです」感動したシャーリプトラは聞いた「あなたの名は何といい、あなたの同行は何と呼んでいますか」「わたしの名はプールナ、同行はわたしをマイトラーヤニープトラと呼びます」「これはこれは、あなたの噂は伺っていましたが、その方によってわが師の教えがこんなに正しく深く解説されようとは思いもよりませんでした。あなたの同行は実に幸福な方々です。あなたに

出会い話を伺えたわたし達もほんとうに幸いでした」プールナが聞いた「あなたの名は何といい、同行は何と呼んでいますか」「名はウパティッサ、同行はシャーリプトラとわたしを呼びます」「ああ、師の釈尊にもたぐえるべきシュラーヴァカと法談をしながら、シャーリプトラ長老とは知りませんでした。分かっていたら、あんな答え方をしなかったでしょう。驚くべき方です。あなたの深い尋ね方によって、師の教えが正しくよく分かるようになりました。あなたの同行は実に幸福な方々です。あなたに出会い、お話しできた私達も幸せです」

アーナンダも「私達が新参のとき、プールナさんはよく教えてくださった」と次の言葉を紹介している。

「友アーナンダよ、若い男や女でおしゃれな連中は、自分が気になるから鏡があれば見、水面があれば見るだろう。すると自分の面相が見えるから、いよいよ気にするだろう。ところがおしゃれっ気のない者は、鏡も水面も見ないから、自分の面相も見やしない。だから気にもしない。そのように形のあるものを気にすれば、それが有るようにみえるが、気にしなければ有りはしない。色の無常とは、それをいうのだ。アーナンダよ。君の心においては色は常だろうか、無常だろうか」「無常です」「同じように受も、想も、行も、識も、無常なのだ。このように観じるようになったら、もはや存在についての煩いを受けることはないだろう」

プールナは、十大弟子の一人に数えられ「説法第一」と師の釈尊からも讃えられたという。たしかにプールナには、釈尊の教えをよく理解し、それを他の人に明白に解説する能力にたけていた。だが、かれがシャーリプトラにいったことは、お世辞ではなく、心の底からの感動だったに違いない。シャーリプトラには相手から、その当人すら思い掛けなかった答えを引き出す力があった。それは、単なる知識や、感性の問題ではない。どのよう

な相手に対しても、心の底から尊敬し共感する素直な謙遜さがその全人格からにじみ出、向かいあっているだけで相手を楽しませ、鼓舞し、自覚しない能力の発揮を促すのだ。「批評」というものが、その対象から最も優れたものを引き出す方法だといえるなら、シャーリプトラはまさに天才的な批評家だった。釈尊もまた、シャーリプトラを弟子としてもつことにより、その教えをどれだけ人々にわかりやすく説きえたかしれないと、みずから思ったに違いない。そのように優れたシャーリプトラを「小乗の徒」と卑しめるのは、作家を鼓舞する優れた批評家を、創作しないからといって、尊敬しない作家のような、忘恩無智であろう。『法華経』で、初めからシャーリプトラが質問者として活躍するのは、彼の批評家としての徳を讃えることによって、問いと答えの相依相乗の縁起法を重要な方法とすることを暗示したためではなかろうか。なお、プールナの七車の喩えは、『法華経』譬喩品の三車の喩えに影を引いているかもしれぬ。構造は違うけれども。

スブーティは、『撰集百縁経』（大正・四）によれば、シュラーヴァスティーのバラモンの子で、成長するにつれ知識は抜群となるが、目に触れるものを悉く罵る癖があった。親族知人にも嫌われ、家を捨て山林に入り、山の神に導かれて釈尊に会い、おのれの過ちを覚って仏弟子となった。『テーラガーター』の注では、富豪スダッタの甥で、スダッタが祇園精舎を釈尊に寄付したときその場に居合わせ、仏弟子となったという。初期教団では「あらそうことなき者の第一」といわれたが、後には「空を理解すること第一」と呼ばれるようになる。「ブッダの教団におけるスブーティの位置も明確ではない」が、不明確のお蔭で、大乗教徒により「空を理解する」という性格を付与されたのだろうと、岩本裕氏の『インド仏教と法華経』にいうのは、鋭い指摘である。

ラーフラは釈尊の太子時代の子である。アーナンダと同年とする説があるが、異説も多い。ラーフラとは「障害」の意。男の子が生まれたことを聞いた時、太子が「障害が生まれた」と嘆いたので、太子の父王が、ラーフラと名付けた、という。釈尊が成道後に帰郷したとき、シャーリプトラの弟子として出家させた。温順で、よく努力したので「禁戒をやぶらず、誦読を怠らない」人と讃えられた。

正・妙両本はラーフラより前にアーナンダを挙げるが、梵本はラーフラを前に置き、アーナンダについては、次のようにいう。

1-4. また、まだ学ばなければならぬ長老アーナンダ（27）、その他二千人の、学ばなければならぬ、学ばなくともよくなった、ビク達がいた。

āyuṣmatā cānandena 27 śaikṣeṇa, anyābhyāṃ ca dvābhyāṃ bhikṣu-sahasrābhyāṃ śaikṣāśaikṣābhyāṃ:

これはアーナンダを、アージュニャータカウンディニャからラーフラにいたる二十六人を含めた「千二百人」とは別の、二千人のグループ（まだ学ぶ余地のある千人の一組と、学ぶ余地のなくなった千人の一組とを、ひっくるめた二千人のグループ）の代表としていることになる。

伝えによれば、第一結集のはじめ、アーナンダはまだ迷いが除かれず、過失もあり、アラカンになっていないといって、参加を許されなかった。彼は懺悔し、その後、アラカンとなったので、参加が許された。この伝えからすれば、『法華経』が説かれる段階では、アーナンダは、学ぶ余地のあるビクであり、アージュニャータカウンディニャ達の大長老と区別するのは理にかなう。また、「このようにわたしは聞いた」というのがアーナンダ

であるなら、先輩のアラカンと自分とを分けて語るのも当然であろう。とはいっても、そのような形式的合理性は、この経典で一貫しているわけでもないので、梵本と正・妙両本と、いずれかを正しいと決定しうるものではない。

アーナンダは、釈尊の従弟で、デーヴァダッタの兄弟であり、アニルッダ達と一緒に仏弟子となった、といわれる。年齢についても違った伝えがあるが、釈尊の五十五歳以後、入滅にいたる二十五年間、侍者として忠実に仕え、師の教えをよく記憶し、「多聞第一」と讃えられたことは有名である。美貌であったため、女人の誘惑が絶えず、さまざまな話題が残されている。

アーナンダの伝記で最も注目すべきことが三つあり、その一は、釈尊の侍者であったこと、二は釈尊の養母マハープラジャーパティーが出家して尼となるのをたすけたこと、三は第一結集に対する功績である。

かれが、他の仏弟子達より遅れ、釈尊の死後にもなおアラカンとなれていなかったのは、侍者として師に仕えるのに忙しく、おのれの悟達に心をくばる暇がなかったからである。マハープラジャパティーの出家によって、仏教教団に尼僧を存在せしめたために「正法五百歳を衰滅させた」のが彼の過ちだと、長老達の間では考えられたらしい。だが、もし釈尊が女性の出家を許していなかったら、一見清潔な僧団は維持できたかもしれぬが、仏教そのものは、ひからびてせせこましく、普遍性をもたないものになっていたおそれがある。

アーナンダがおのれのニルヴァーナを犠牲にして師に仕えたこと、師や先輩長老の喜ばぬことを知りながらあえて女性の出家に手を貸したことは、「菩薩行」といえるのではないか、落ちこぼれアーナンダなればこその。